

【秩父夜祭】

秩父夜祭の歴史

秩父夜祭は、12月2日と3日に開催される、秩父神社に祀られている神々に敬意を表す祭りである。祭りの期間中、神社の近くを6基の山車が曳き回される。山車の中で屋台ばやし、引き踊り、歌舞伎が演じられるが、そのとき山車はその場に停まっている。6基の山車があり、そのうちの2基は、「花の日傘」（笠鉾）で、笠に差し込まれた鉾は依代とされ、提灯で覆われている。そして4基の屋台は、屋台囃子を乗せている。祭りは現在の形で300年以上続いており、日本の「三大山車祭」（日本三大曳山祭）の一つとみなされている。

この祭りがどのくらい前に始まったかは正確には分かっていないが、二千年以上も昔、秩父神社の創建以前にさかのぼると考えられている。秩父神社は、秩父盆地の中央に位置し、武甲山を一望できる。この山は、東京とその北西部の地域の重要な支流である荒川の主流を形成しており、古くから神聖なものと見なされてきた。神社の聖なる森である柞の森は、山を遥拝する場所であり、秩父神社に祀られている神のひとつである妙見様の棲む森とされている。

言い伝えによると、妙見様（女神とされる）と武甲山様は互いに相思相愛だが、諏訪神社の神は龍神の正妻である。毎年12月2日に、妙見様は聖なる森から諏訪神社へ出向き、龍神である恋人の武甲山様と一夜の逢い引きの許しを請うと言われている。昔からの慣わしで、本町からの山車が神幸路の途中にあるこの小さな神社を通過する際、お囃子を止める。そして見物人は二人の逢瀬の邪魔にならないよう、小声で話す。事が全て順調に運ばば、妙見様と武甲山の神は、秩父市役所近くの秩父公園に祀られている亀の子石（亀の石像）で再会する。

現代の祭りを構成する山車や花火などといった要素のほとんどは、時とともに進化したり、加えられたりしてきた。鎌倉時代（1185～1333年）、妙見菩薩（サンスクリット語：スダルシャナ）が秩父神社に合祀されたのとほぼ同時期に、神馬が幕府から寄進された。この行事は、毎年地元の神社への御神幸行列（お宮参り）で山車に同行する2頭の神馬で再現され、馬は行事の終わりに秩父神社に供奉される。

現代の夜祭は、主に江戸時代（1603～1867年）に発展した。当時は「妙見大祭」あるいは「霜月大祭」として知られており、11月上旬に開催されていた。祭りは、神社の近くにあった「絹大市」（キヌノタカマチ）の経済的成功により、その発展に拍車がかかった。絹商人たちが商品を販売するために周辺地域からやってきて、祭りに参加していたのである。この地域の経済が開花するにつれて、祭りの規模や豪華さも増した。

今では夜祭のシンボルとなった6基の山車は、17世紀半ばまたは18世紀初頭に始められたが、違法とされていた時期が数年間あった。江戸時代後半に、庶民の風紀を乱すとみなされたことから、幕府は山車の巡行や屋台歌舞伎といった夜の文化を厳しく制限したのである。1827年以降、宗教的な祭りは完全に禁止された。秩父の6地区は政府の制限措置に抵抗し、禁止令が解除されるまでの50年間、ある年には3つの地区で、別の年には他の3つの地区で例年祭を開催し続けた。今日では、祭りの期間中に曳き回される6つの山車がこれらの6つの町を代表している。

山車は、伝統的な日本の木材建具技術を使用して作られており、釘が一本も使われていない。

秩父まつり会館

秩父神社の近くに位置する秩父まつり会館の 2 階には、夜祭の歴史や、秩父のそのほかたくさんのユニークな祭りや文化行事が詳しく説明されているさまざまな展示がある。1 階には小さな劇場があり、ここでは秩父の主な年中行事を紹介する短い動画や、屋台や笠鉾の複製を見ることができる。展示に用いられるプロジェクションマッピングと豪壮な音響効果は、山車の複製と展示スペースに命を吹き込み、建物の中に夜祭の雰囲気を作り出す。秩父まつり会館は、夜祭が開催されている期間を含み、午後 5 時まで年中無休でオープンしている。